

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### 『魔王』 (Erlkonig) 覚書

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1984-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/671">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/671</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『魔王』(Erlkönig) 覚書

木 戸 芳 子

## 目 次

はじめに

第一章 デンマーク民謡とヘルダーの『魔王の娘』

(以下は次号に掲載予定)

第二章 教材としてのゲーテの詩『魔王』

- (一) 邦訳及び韻律
- (二) 学習目標及び課題
- (三) 構成
- (四) 各連ごとの分析
- (五) 全体のコメント及びヘルダーとの比較
- (六) 『魔王』を中心にバラード全般についての概観
- (七) 『魔王』のパロディー紹介とその教授例

第三章 『魔王』に付曲した作曲家達とゲーテ

おわりに

はじめに

「ゲーテを読まなくなったドイツ人」ということが言われるようになって久しい。(注1) 西ドイツの学校でも国語(ドイツ語)の教材にゲーテが取り上げられることが減少した。このことに関連して、1979年1月16日付フランクフルター・アルゲマイネ紙の社説には「私達のゲーテ」(Unser Goethe)と題して次のような趣旨のことが述べられている。(注2)

「今日の西ドイツ社会では、そもそも共通の合意というものがなくなってしまった。そのため国語教育においても、読むべき文学作品について規範(Kanon)の一致が見られなくなった。こうした社会状況のもとで教材選定の際も、その主流は、ゲーテ、シラー、レッシングといった古典作家や、トーマス・マン、ブレヒト、グラス等からいわゆる三文文学作品(Trivial-literatur)や広告、コマーシャル、あるいはジャーナリズムの文章へと移ってきている。その理由として次のようなことが考えられる。即ち、古典作家を忌まわしい教養市民社会のノスタ

ルジーと決めつけ、現代社会からかけ離れた陳腐なものとしてみる流れが1960年代に出てきたこと。さらに文学を三文文学と高級文学とに色分けすることが、差別だという視点から文学の概念が拡大されたこと。さらに、二度の世界大戦に敗れた体験からナショナリズムの行き過ぎを警戒するあまり、少しでも国家主義に結びつきそうな国語教育は避けられるようになったということが挙げられる。しかし、社会を成り立たせてゆくためには、共通の言語の世界を土台にした民族が必要であり、その共通の世界は単なるブームものでなく、ゲーテのようなものでなくてはならない。」

さらに、翌1月17日付同紙は、「日本のゲーテ」(Japans Goethe)と題して、「地球の裏側の国では、ゲーテは単に知られているばかりでなく、よく読まれてさえいる。その国は日本である。」と言って、日本人のゲーテ熱とゲーテに対する関心の深さに驚嘆している。

たしかに、ゲーテは我が国において明治期以来、幅広い読者層を獲得してきた。(注3)ゲーテによって開眼された文学者、作家も数多い。ゲーテ学者、ゲーテ研究者も枚挙にいとまがないほどである。しかし、ゲーテが教材として果たしてどの程度読まれているだろうか。ごく普通の生徒、学生達がどの位ゲーテの作品に親しんでいるかといったことを考えると、必ずしも教材としてのゲーテが学校の中に定着しているとは言いがたい。

そこで私は、我が国及び諸外国の教科書が収集されている「教科書研究センター」で、西ドイツと日本の国語(ドイツ語)教科書を中心に現行教科書の目次を繰ってみた。私が調べた限りでは、ゲーテの作品が我が国の国語の教科書の中に取り上げられている例を見い出せなかった。(注4)ゲーテという名前が必ず登場するのは(高校の世界史の教科書で、18世紀のヨーロッパの文学者達の一人として、名前だけ出てくるのを除いては)中学校の音楽の教科書である。(注5)即ち、シューベルトの作曲で有名な『魔王』の作詞者としてである。しかし、『魔王』がシューベルトの作品であることはよく知られていても、その歌詞の作者がゲーテであること、さらに『魔王』がシューベルト以外に大変多くの作曲家達によって付曲されているという事実は、意外に一般には知らされていないようである。このゲーテの詩『魔王』に関して言えば、ほとんど東西ドイツともに大体8年生の段階で(日本の中学二年生に相当する)バラードの代表的作品として国語の教科書で扱われている(注6)。

さて、現在音楽大学で「ドイツ語」を担当する一教師にとって、一般教養のドイツ語の時間に、もしゲーテを取り上げるとしたらどのように教授したらよいか。さらに音楽大学の学生が抱く最大の興味関心事である音楽に係わる題材を扱いながら、併せてドイツ文法の知識のみならずドイツの言語文化といったものに、多少とでも接触させるためにはどのような方法があるか。以上のような問題意識をもって、『魔王』を教材として使ってはどうかと考えてみた。以下に報告するものは、そのために、教師の側としてあらかじめどのような準備をしておいたらよいか、私なりに出来得る限り参考文献にもあたり、『魔王』についての予備知識を整理し検討してみたその覚書である。

[使用テキスト及びその略号]

Goethes Werke : Hamburger Ausgabe (H. A), Artemis Ausgabe (A.A.),

Weimarer Ausgabe (W.A), Deutsche National-Literatur (D.N.L.)

注

- (注1) 例えば、菊池栄一『ゲーテを読まないドイツ人とゲーテを読む日本人』参照（潮出版社版「ゲーテ全集」第1巻月報所収）
- (注2) なお毎日新聞昭和54年2月9日付「アンテナ欄」も参照。同欄に「ゲーテを忘れたドイツ人」と題して、フランクフルター・アルゲマイネ紙の記事の一部がボン特派員伊藤光彦氏によって紹介されている。
- (注3) 例えば木村直司『日本におけるゲーテ受容の諸問題』（「続ゲーテ研究」南窓社 1983年 所収）を参照。
- (注4) ただし高等学校の国語教科書で一点だけ手塚富雄氏のゲーテをめぐる随想『いきいきと生きよ』（講談社新書）の一節を載せているものがあった。
- (注5) 『中学校学習指導要領』音楽編では、中学校一年生の必修鑑賞曲の一つとしてシューベルト作曲『魔王』が挙げられている。
- (注6) 西ドイツで国語（ドイツ語）の教科書に取り上げられているゲーテの作品としては次のようなものがある。（原語のまま掲げる）
- ① 詩： „Der Fischer“, „Erlkönig“, „Der Zauberlehrling“, „Der Sänger“, „Der getreute Eckart“, „Gefunden“, „Heidenröslein“, „An meine Mutter“,（以上初・中級段階） „Ganymed“, „Prometheus“, „Willkommen und Abschied“, „Mahomets Gesang“, „An den Mond“, „Wandrer's Nachtlid“, „Ein Glückliches“, „Das Göttliche“,（以上上級段階）
  - ② 戯曲： „Götz von Berlichingen“, „Faust I“, „Iphigenie auf Tauris“ („Egmont“, „Torquato Tasso“ が取り上げられることは稀である)
  - ③ 叙事詩的作品： „Reineke Fuchs“（初級）, „Hermann und Dorothea“（中級）
  - ④ 小説： „Die Leiden des jungen Werthers“（上級） („Die Wahlverwandtschaften“, „Wilhelm Meisters Lehrjahre/Wanderjahre“ が取り上げられることは稀である。)
  - ⑤ ノンフィクション： „Dichtung und Wahrheit“, „Von deutscher Baukunst“, „Zum Shakespeares-Tag“, „Briefe an (und von) Schiller“
  - ⑥ 重要な作品ではあるが教科書に取り上げられない理由として „Wahlverwandtschaften“, „Torquato Tasso“ は理解が難しいから。 „Wilhelm Meister“ は長すぎるから。 „Faust II“ の場合そこまで教える時間がないから。「後期抒情詩」は教授が難しいから。

(以上、Manfred Lauffs, Lernziel : Goethe, in : Johann Wolfgang Goethe, Sonderband aus der Reihe TEXT+KRITIK, München 1982 に拠る。)

## 第一章 デンマーク民謡とヘルダーの『魔王の娘』

本章では、ゲーテの創作の材源となったとされているヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744—1803) の作品と、さらにヘルダーが典拠にしているデンマーク語の原詩の紹介を中心に、ゲーテの詩『魔王』 („Erlkönig“) が成立するに至る背景をまとめておきたい。

この詩が成立したのは1782年である(注1) しかし正確な月日はよくわからない。もともとは、小歌劇『漁夫の娘』 („Die Fischerin“) の中で、漁夫の娘であるドルトヒェン (Dortchen) が歌う小曲として挿入されているものである。(注2) 『魔王』については、「余りに流布した知識によってその内容がおおい隠されてしまっているのです、私たちは知識の堆積をふりはらってこれを理解し直さなければならない。」(注3) とエミール・シュタイガーも言っているが、やはり最初に二つほどエピソードを紹介しておく。(注4)

- (1) ある裕福な農夫の一人息子が重病に陥り、イエナの有名な医師に診察してもらった。父親は息子を大切に抱き、馬を駆って家路を急いだが、我が家に到着した時すでに子供は死んでいた。ゲーテはその2～3日後にこの話を聞いて心を動かしたという。
- (2) ゲーテは当時、シュタイン夫人の末っ子であったフリッツ (愛称、本名 Friedrich Gottlob Konstantin von Stein, 1772—1844) を大変可愛がっていた。フリッツはこの頃ちょうど10歳である。ゲーテはこのフリッツを連れて、よく馬を走らせた。ある日イルメナウの山麓からワイマルへ向かう途上で、『魔王』の着想が浮かんだという。

なおこれに関連して、シュタイガーも引用しているが『スイスからの手紙』 („Briefe aus der Schweiz“) の中に次のような箇所がある。「この道を行くときほんの少しでも自ら思い込む力 (Einbildungskraft) に取り憑かれてしまうなら、ここには見るところ危険はなさそうなのに確かに不安と恐怖のあまり、意気消沈せざるを得なくなるのであろう。」(注5)

さて、ゲーテの詩『魔王』の原型であるヘルダーの『魔王の娘』 („Erlkönigs Tochter“) の内容に入る前に、ゲーテとヘルダーとの関係について、小論に関係のある範囲内でごく簡単にまとめておく。

すでに周知の事柄であるが、1770年シュトラースブルクにおけるヘルダーとゲーテとの出会いは、ゲーテ自身にとってのみならず、ドイツ文学史上でもきわめて重要な出来事であった。「私は (ヘルダーとの出会いによって) 今までとは全く違った側面、違った意味で、しかも私の性分によく適った意味で詩歌というものを、知るようになった。」(注6) と『詩と真実』 („Dichtung und Wahrheit“) の中でゲーテは回想しているが、彼はヘルダーによって、いわば「これまで本能的に予感し求めていた何か」(注7) を見い出すことができた。即ち、それは自然の発露としての「民謡」 (Volkslied) であった。「私達が年来民謡と呼び慣れているこの種の詩は、……幹の太いがっしりしたもの (Stämmiges), 力強いもの (Tüchtiges) をそれ自身の中に持っている。……それはおよそ存在している中でもっとも真実な詩である。」(注8)

「(民謡とは) 民族の歌謡である。即ち、どんな民族であれ、その民族を本来的に特徴づけ、民族全体とまではいかななくても、或種の主要で基本的な特徴をよく表現している、そういう歌謡のことである。」(注9) 「いわゆる民謡の本来の価値は、そのモチーフを直接自然から取っているところにある。教養ある詩人もそのことを理解するなら、この長所を取り入れることはできる。しかし民謡の作者である自然人は教養人よりも簡潔さ(Lakonismus) というものをよりよくわかっている点で、自然人が作る民謡の方がすぐれている。」(注10) 以上のようにゲーテは民謡観を語っているが、ヘルダーとの出会いによってゲーテが開眼させられたものは、こうした無尽蔵な文学的宝庫としての民謡であった。それは当時の硬直したロココ文化、啓蒙主義に対し、自然なもの、素朴なもの、純真なものを求めたシュトゥルム・ウント・ドラングの運動とも符号している。「(ヘルダーが) 私達を駆り立てて収集させたエルザスに伝わる民謡や、詩としての最古の記録は、詩作というものが世界及び民族の賜物であって、決して二、三の上品な教養人の私的財産ではないということを証明した。私はそれらすべてを貧った。私が熱心に求めれば求めるほど、彼も惜しみなく与えてくれた。」(注11) (『詩と真実』)

このようにして、ゲーテはヘルダーの『民謡集』 („Volkslieder“ 1778/1779) (注12) の編集に協力することになった。そして、ヘルダーの『魔王の娘』は、この『民謡集』第4巻、『北方の歌』 („Nordische Lieder“) の中の『デンマークの歌』 („Dänische Lieder“) の部分に収録されている。これはもともとは、デンマーク語の民謡をヘルダーがドイツ語に翻訳し紹介しているものである。(このヘルダーの翻訳に刺激を受け、ゲーテは彼独自の詩的構想力によって『魔王』を創作することになるのである。(注13) 最近『デンマーク文学作品集』(注14) が原文と対訳という形で刊行され、その中にデンマーク語の原詩も掲載されている。以下まずその部分を引用させていただく。

#### ELVERSKUD

Hr. Oluf rider saa vide,  
alt til sit Bryllup at byde.  
Men Dansen den gaar saa let gennem Lun-  
den.

Hr. Oluf rider med Bjerger,  
der dansed Elver og Dverger.  
Der dansed fire, der dansed fem,  
Elverkongens Datter rækker Haanden  
frem.

Elverkongens Datter rækker Haanden  
fra sig:  
„Og lyster Hr. Oluf træde Dansen med  
mig?“

#### 妖精の呪いの一撃

オールフ卿は駒をすすむるおちこちに、  
すべてのものを祝言に招きつつ。  
踊りはかあろく軽く林の中をいく。

オールフ卿は駒をすすむる丘づたい、  
そこで踊るは妖精と小人たち。  
そこに四人、あそこに五人が踊り、  
妖精王の娘が手をさし出す。

妖精王の娘は手をさし出だし、

「オールフ様、わたしと踊ってくださいますか？」

„Jeg ikke tør, jeg ikke maa!  
i Morgen skal mit Bryllup staa.“  
„Og hør du, Hr. Oluf, træd i Dansen  
med mig!  
to Bukkeskinds Støvler saa giver jeg dig.  
To Bukkeskinds Støvler, sidder vel om  
Ben,  
forgyldene Sporer derom spændt.  
Hør du, Hr. Oluf, træd i Dansen med  
mig!  
en Silkeskjorte giver jeg dig.  
En Silkeskjorte saa hvid og fin,  
den blegte min Moder ved Maaneskin.“  
„Jeg ikke tor, jeg ikke maa,  
i Morgen skal mit Bryllup staa.“  
„Hør du, Hr. Oluf, træd i Dansen med  
mig!  
et Hoved af Guld saa giver jeg dig.“  
„Et Hoved af Guld kan jeg vel faa,  
men danse med dig jeg ikke maa.“  
„Og vil du ikke danse med mig,  
Sot og Sygdom skal følge dig!“  
Hun slog ham for hans Hærdeblad,  
det gjalded under hans Hjerterod.  
Hun løfte Hr. Oluf paa Ganger rød:  
„Du rid nu hjem til din Fæstemø!“—  
Der han kom til Borgeled,  
der staar hans Moder og hviler sig ved.  
„Hør du, Hr. Oluf, kær Sønne min:  
hvi bær du saa bleg en Kind?“  
„Jeg maa vel være om Kinden bleg,  
for jeg har været i Elvekvindens Leg.“  
  
„Hør du, Hr. Oluf, kær Sønne min:  
hvad skal jeg svare unge Brud din?“

「それはならぬ、それはできぬ!  
明日はわたしの祝言あれば。」  
「さあ、オールフ様、わたしと踊ってくだ  
さい!  
やぎ皮の長靴ひと組さしあげましょう。  
やぎ皮の長靴ひと組、お足によく似合いま  
す、  
それに黄金の拍車もつけて。  
さあ、オールフ様、わたしと踊ってくださ  
い!  
絹のはだ着をさしあげましょう。  
あれほど白く立派な絹のはだ着、  
母さまが月の光にさらしたものを。」  
「それはならぬ、それはできぬ!  
明日はわたしの祝言あれば。」  
「さあ、オールフ様、わたしと踊ってくだ  
さい!  
頭ほど大きな黄金をさしあげましょう。」  
「頭ほど大きな黄金は頂戴もしようが、  
おまえと踊ること 出来かねる。」  
「わたしと踊ってくださらぬなら、  
病いわずらい死になさい!」  
娘は卿の肩をうち  
その一撃は彼の心臓の奥底までこだました。  
娘はオールフ卿を赤毛の駒にのせ、  
「さあ、許嫁御のもとに行きなさい!」一  
卿が館の門についたとき  
そこで休息んでいたのは卿の母。  
「これわが息よ、オールフ殿、  
どうしてお顔がそんなに蒼いのです?」  
「顔が蒼くとも不思議はありません、  
妖精女らのあそびに巻きこまれていたから  
です。」  
「これわが息よ、オールフ殿、若い花嫁  
どのになんと言ったらいいのです?」

„Du sige, jeg er i Lunde,  
 at prøve Hest og Hunde.“  
 Aarle om Morgen, det var Dag,  
 da kom den Brud med Brudeskar’.  
 De skænkte Mjød, og de skænkte Vin:  
 „Hvor er Hr. Oluf, kære Brudgom  
 min?“  
 „Hr. Oluf er i Lunde,  
 at prøve Hest og Hunde.“  
 „Har han kærer’ sin Hest og Hund,  
 end-han har sin unge Brud?“  
 Hun ledte i Lofte, hun ledte i Vraa,  
 hun fandt Hr. Oluf paa Bolster blaa.  
 Hun tog op det Skarlagen rød,  
 da laa Hr. Oluf og var død.  
 Hun mindede ham for sin røde Mund,  
 saa døde hun i den samme Stund.  
 Aarle om Morgen, før det var Dag,  
 da var der tre Lig i Hr. Olufs Gaard.  
 Den ene Hr. Oluf, den anden hans Mø,  
 den tredje hans Moder, af Sorgen var  
 død.  
 Men Dansen den gaar saa let gennem Lun-  
 den.

「言ってください、わたしは林で  
 馬と犬を仕込んでいます。」  
 朝はやく、日もあかるくなった頃  
 花嫁はおともをつれてご到着。  
 蜜酒がつがれ、ぶどう酒がつがれた、  
 「オールフ様、いとしい花婿さまはどこで  
 ですか。」  
 「オールフ殿は、林で  
 馬と犬とを仕込んでいます。」  
 「花婿さまは若い花嫁よりも  
 馬や犬をご自慢ですか。」  
 花嫁は屋根裏をさがし、そのすみから隅ま  
 でさがし  
 青いふとんに横たわるオールフ卿を見い出  
 した。  
 深紅のかけふとんを持ちあげた花嫁の  
 目に入るは、はや息たえしオールフ卿。  
 その紅き唇くちに別れの口づけすれば  
 たちまち彼女もこときれた。  
 朝はやく、夜のまだ明けきらぬ頃  
 オールフ卿の館には三つの亡きがら横たわ  
 る。  
 一つはオールフ卿、二つは卿の花嫁、  
 三つは卿の母、悲しみに息たえた。  
 踊りはかあろく軽く林の中をいく。

次にこのデンマーク語原詩をヘルダーはどのようなドイツ語に直したか。邦訳と併せて掲げておく。(注15)

Erlkönigs Tochter (Dänisch)  
 Herr Oluf reitet spät und weit,  
 Zu bieten auf seine Hochzeitleit’;

魔王の娘  
 オールフさんは夜遅く馬で遠出をする、  
 自分の婚礼招待に回るため;



Da tanzen die Elfen auf grünem Land',  
Erlkönigs Tochter reicht ihm die Hand.

„Willkommen, Herr Oluf, was eilst von  
hier?

Tritt her in den Reihen und tanz' mit mir.“

„Ich darf nicht tanzen, nicht tanzen ich  
mag,

Frühmorgen ist mein Hochzeittag.“

„Hör an, Herr Oluf, tritt tanzen mit mir,

Zwei güldne Sporne schenk ich dir.

Ein Hemd von Seide so weiß und fein,  
Meine Mutter bleichts mit Mondenschein.“

„Ich darf nicht tanzen, nicht tanzen ich  
mag,

Frühmorgen ist mein Hochzeittag.“

„Hör an, Herr Oluf, tritt tanzen mit mir,

Einen Haufen Goldes schenk ich dir.“

„Einen Haufen Goldes nähm ich wohl;  
Doch tanzen ich nicht darf noch soll.“

„Und willt, Herr Oluf, nicht tanzen mit  
mir;

Soll Seuch und Krankheit folgen dir.“

Sie thät einen Schlag ihm auf sein Herz,  
Noch nimmer fühlt' er solchen Schmerz.

Sie hob ihn bleichend auf sein Pferd,  
„Reit heim nun zu dein'm Fräulein werth.“

Und als er kam vor Hauses Thür,  
Seine Mutter zitternd stand dafür.

„Hör an, mein Sohn, sag an mir gleich,

あそこの緑の原で妖精達が踊っている、  
魔王の娘が彼に手をさしのべる。

「歓迎、オールフさん、どうしてここから  
お急ぎになるの？

輪に入って私と一緒に踊りなさい。」

「僕は踊ってはいられない、踊りたくもな  
い、

明朝は僕の結婚式なんだ。」

「まあお聞きなさいな、私と一緒に踊りに  
入りなさい、

金の拍車を一組私はあなたに贈りましょう。

絹の肌着も真白で上質なのよ、  
母様が月の光でさらしたのものよ。」

「僕は踊ってはいられない、踊りたくもな  
い、

明朝は僕の結婚式なんだ。」

「まあお聞きなさい、オールフさん、私と  
一緒に踊りに入りなさい、

黄金を一山私はあなたに贈りましょう。」

「黄金の山なら頂戴したいけれど；  
やっぱり僕は踊ってはいられないし、何としま  
って踊ってはならないんだ。」

「どうしても、オールフさん、私と一緒に  
踊る気持がないのなら；  
疾病や悪いやまいをあなたにつけてしまいま  
しょう。」

彼女は彼の心臓めがけて一撃した、  
彼はこんな痛みをこれまで受けたことはなか  
った。

彼女は蒼白の彼を馬にのせた、

「さあお前の大事なお嬢さんの所へ帰るが  
いい。」

彼が家の戸口に着いたとき、

迎えに出た母親はふるえて立っていた。

「お聞きよ、お前、早く言っておくれ、

Wie ist dein' Farbe blaß und bleich ?“  
 „Und sollt sie nicht seyn blaß und  
 bleich,  
 Ich traf in Erlenkönigs Reich. “  
 „Hör an, mein Sohn, so lieb und traut,  
 Was soll ich nun sagen deiner Braut ?“  
 „Sagt ihr, ich sey im Wald zur Stund,  
 Zu proben da mein Pferd und Hund. “  
 Fröhlichen Morgen und als es Tag kaum war,  
 Da kam die Braut mit der Hochzeitschaar.  
 Sie schenkten Meed, sie schenkten Wein,  
 „Wo ist Herr Oluf, der Bräutigam mein ?“  
 „Herr Oluf, er ritt' in Wald zur Stund,  
 Er probt allda sein Pferd und Hund. “  
 Die Braut hob auf den Scharlach roth,  
 Da lag Herr Oluf und er war todt.

どうしてお前は顔面蒼白で血の気がないの?」  
 「顔色は青ざめ血の気があるはずはありません、  
 僕は魔王の国へ行ったんだ。」  
 「お聞きよ、いとしいお前、  
 お前の花嫁様には何と言ったらいいの?」  
 「彼女に言って下さい、森の中で今頃は、  
 馬と犬とを仕込んでいますと。」  
 朝早く明るくなると、  
 花嫁は招待客の一行とやってきた。  
 みんなは蜜酒、ぶどう酒をついだ、  
 「どこにオールフさんはいらっしゃるの、私  
 の花婿様は?」  
 「オールフさんは、今ごろは森の中で、  
 そこら中、馬と犬とを仕込んでいます。」  
 花嫁は深紅色の布を引き上げた、  
 そこにはオールフさんが横たわり、息絶えて  
 いた。

デンマーク語の原詩とヘルダーによるドイツ語訳を比較してみるとまず次のことに気づく。

- (1) 原詩の表題は、„Elverskud“ (= von der Elfen geschossen) 即ち、『妖精の呪いの一撃』であるが、ヘルダーの表題は „Erlkönigs Tochter“ 即ち、『魔王の娘』となっている。
- (2) 原詩の第三行と最後の行で繰り返されている「踊りはかあるく軽く林の中を行く」(注16)の行がヘルダー訳にはない。
- (3) 最後の七行が、ヘルダー訳では省かれている。

ところで、デンマーク語の „ellerkonge“ (= elverkonge) をヘルダーは、低地ドイツ語で Eller = Erle 即ち、「ハンノキ」ということから ellerkonge = Erlkönig つまり「ハンノキの王」だと思わずごしてしまった。本来のデンマーク語の原義にしたがえば ellerkonge = Elfenkönig つまり「妖精の王」と訳さなければならないところである。我が国では Erlkönig = 魔王という訳語がすでに定着しているので、私も上記のように表題を „Erlkönigs Tochter“ = 「魔王の娘」と翻訳したが、このような経緯を考慮すると、「ハンノキの王の娘」とした方がヘルダーの意図に忠実であると言える。

ところが、以上のようなヘルダーによる „ellerkonge“ の誤訳はかえってゲーテの眼には、大変に新鮮で魅力のあるものとして映ったらしい。というのは、当時のドイツ文学の中には、ハンノキの精などという妖精は存在していなかったこと。しかしドイツでは昔から木に精が宿るという考え方はごく一般的であったということ。この二つの理由から、この「ハンノキの

王」という新しい名前は、ゲーテをはじめとする当時の詩人達のイマジネーションを大いに掻きたてるものとなった。「この王はそれまでドイツ語では未知のものであったので、秘密めいた伝説上の人物として、つまりは『魔王』(Erlkönig)として思い描く他はなかった。」(注17)のである。

こうしたゲーテにおける妖精(Elfe)とハンノキ(Erle)とのイメージの交錯は、例えば次の例からも窺える。1780年(ヘルダーの訳詩が発表された翌年)10月15日付のシュタイン夫人に宛てた書簡から引用する。即ち「得も言われぬほどの美しい月夜です。新道を通って走って行きました。あたりの夜はまるで天国のようです。妖精たちが歌っていました。」という前書きに始まり(注18)ゲーテは以下のような詩を書いている。(注19)

#### Gesang der Elfen

#### 妖精の歌

Um Mitternacht, wenn die Menschen erst  
schlafen,  
Dann scheint uns der Mond,  
Dann leuchtet uns der Stern,  
Wir wandeln und singen  
Und tanzen erst gern.

真夜中、人がようやく眠るころ、  
わたしたちの前に月がさしいで、  
星が輝くとき、  
はじめて楽しくとびまわり  
歌って踊ります。

Um Mitternacht, wenn die Menschen erst schlafen,  
Auf Wiesen an den Erlen  
Wir suchen unsern Raum  
Und wandeln und singen  
Und tanzen einen Traum.

真夜中、人がようやく眠るころ、  
草原のハンノキに  
場所をみつけて  
とびまわり歌って  
夢みつつ踊ります。

要するに、人間が皆寝静まる真夜中に、妖精達が踊りまわり歌をうたう場所が、第2連第2行の「草原のハンノキに」 („Auf Wiesen an den Erlen“) というわけである。

ごく大雑把であったが『魔王』成立の背景知識を整理してみた。ヘルダー『魔王の娘』とゲーテの『魔王』の比較については次章で検討することにしたい。

(本学講師＝独語担当)

#### 注

(注1) Vgl. Goethes Werke, H. A. Bd. 1, S. 482.

(注2) 『漁夫の娘』は1782年ティーフルトで上演された。その際ドルトヒュンを演じたのは宮廷歌手コロナ・シュレーター (Corona Schröter, 1751-1802) であった。彼女はこの詩に付曲もした。なお、この『魔王』の詩の草稿がすでに前年には出来ていたということは1781年8月5日のゲーテの日記から窺える。「コロナ来訪。『漁夫の娘』のアリアに手を入れる」 (Vgl. D. N. L. Bd. 88, S. 288)

(注3) エミール・シュタイガー『ゲーテ』上、三木正之他訳 人文書院 1981年 300頁 (Vgl. Emil

Staiger : Goethe 1749—1786. Atlantis Verlag 1957 Zürich, S. 343)

- (注4) 邦語文献として 道部順『ゲーテの生活と詩の鑑賞(上)』創元社 1956年 387—393頁, 万足卓『魔法使いの弟子—評釈ゲーテのバラード名作集』三修社 1982年 74—83頁を参照。なおドイツ語文献としては Richert Siecher : Erläuterungen zu Goethes Gedichten, Georg Funk : Erläuterungen zn Goethes Gedichten 等を参照。
- (注5) 『スイスからの手紙』1779年11月12日を参照。ゲーテは1779年秋から翌1780年1月にかけてワイマル大公カール=アウグストと共にスイス旅行をした。この旅行の途次遭遇した様々な体験が『魔王』の詩作の中にも影響を及ぼしている。(Vgl. W. A. Bd. 19, S. 291)
- (注6) Goethes Werke, H. A. Bd. 9, S. 408.
- (注7) Fr. Gundolf : Goethe, Berlin 1916, S. 92.
- (注8) Goethes Werke, A. A. Bd. 14, S. 457.
- (注9) a. a. O. Bd. 14, S. 507.
- (注10) a. a. O. Bd. 9, S. 565 f.
- (注11) a. a. O. H. A. Bd. 9, S. 408 f.
- (注12) 1807年改題され, 『歌にあらわれた諸民族の声』(„Stimmen der Völker in Liedern“)として出版された。以下, ヘルダーの引用は D. N. L. に拠る。
- (注13) 一般に『魔王』については主な材源が二つあるとされている。一つは今挙げたヘルダーの『魔王の娘』であり, もう一つはビュルガー (Gottfried August Bürger, 1747—1794) の『レノーレ』(„Lenore“ 1773) である。ただし『レノーレ』の場合直接的影響としてヘルダーほど取り上げられることはあまりないようである。(Vgl. Goethes Werke, H. A. Bd. 1, S. 448 f.) 以下, やや煩雑にわたるがビュルガーの『レノーレ』の原詩及び邦語訳を参考までに掲げておく。

Lenore

レノーレ

Lenore fuhr ums Morgenrot  
Empor aus schweren Träumen :  
»Bist untreu, Wilhelm, oder tot?

レノーレは朝焼けの中  
重苦しい夢から飛び起きた :  
「ヴィルヘルム, 裏切っておしまいなの, それとも死んでいらっしやるの?

Wie lange willst du säumen?«—  
Er war mit König Friedrichs Macht  
Gezogen in die Prager Schlacht  
Und hatte nicht geschrieben,  
Ob er gesund geblieben.

いつまでぐずぐずしていらっしやるおつもり?—  
彼はフリードリヒ王の軍について  
プラハの戦いに出むいたのだった  
それで便りを書かなかったのだ,  
彼が元気であるか否かということ。

Der König und die Kaiserin,  
Des langen Haders müde,  
Erweichten ihren harten Sinn  
Und machten endlich Friede;  
Und jedes Heer, mit Sing und Sang,

フリードリヒ王と女帝は,  
長い争いに疲れ果て,  
頑固な気持も和らいで  
共にようやく仲直り;  
各軍隊は, 鉦や太鼓を,

Mit Paukenschlag und Kling und Klang,  
Geschmückt mit grünen Reiserh,  
Zog heim zu seinen Häusern.

Und überall, allüberall,  
Auf Wegen und auf Stegen,  
Zog alt und jung dem Jubelschall  
Der Kommenden entgegen.  
»Gottlob!« rief Kind und Gattin laut,  
»Willkommen!« manche frohe Braut.  
Ach! aber für Lenoren  
War Gruß und Kuß verloren.

Sie frug den Zug wohl auf und ab

Und frug nach allen Namen;  
Doch keiner war, der Kundschaft gab,  
Von allen, so da kamen.  
Als nun das Heer vorüber war,  
Zerraupte sie ihr Rabenhaar  
Und warf sich hin zur Erde  
Mit wütiger Gebärde.

Die Mutter lief wohl hin zu ihr:  
»Ach, daß sich Gott erbarme!  
Du trautes Kind, was ist mit dir?«  
Und schloß sie in die Arme. –  
»O Mutter, Mutter! hin ist hin!

Nun fahre Welt und alles hin!  
Bei Gott ist kein Erbarmen.  
O weh, o weh mir Armen!«–

»Hilf Gott, hilf! Sieh uns gnädig an!

Kind, bet ein Vaterunser!  
Was Gott tut, das ist wohlgetan,

響かせながら賑かに,  
青々とした若枝で身を飾り,  
故郷むかって行進した。

到る所で、あらゆる場所に、  
大道小道に到るまで、  
老いも若きも歓呼して  
集って来た人々に迎えられ軍隊は進んだ。  
「有難い！」子供も妻も声を大きく呼びかけて、  
「歓迎！」するがよい 喜びの花嫁よ。  
ああ！けれどもレノールには  
歓迎し接吻する者も失くなってしまったのだ。

彼女は行き過ぎる軍隊のあちらこちらで尋ねまわ  
った。

あらゆる名前について問いかけた；  
だのに知らせてくれる人はいなかった、  
そこに来た人々の誰として。  
やっと軍隊が通り過ぎた時、  
彼女は真っ黒な髪をかきむしり  
身を大地に投げ出した  
怒り狂った仕草をしながら。

彼女のそばに母親は走り寄り：  
「ああ、神よ憐れみを！  
かわいい娘よ、どうしたの？」  
と娘を抱きしめた。—  
「ああお母様、お母様！すべて去ってしまいまし  
たのよ！

もう世もすべて何もかも消えてしまいがよい！  
神には憐れみの念はありはしない。  
ああ悲しい、この哀れな私！」—

「お救い下さい、神様！慈悲深い眼差しを注いで  
下さい！

娘よ、父なる神に祈りなさい！  
神が行なうことは、善いことなのです、

Gott, Gott erbarmt sich unser!《-  
》O Mutter, Mutter! eitler Wahn!  
Gott hat an mir nicht wohlgetan!  
Was half, was half mein Beten?  
Nun ists nicht mehr vonnöten.《-

》Hilf Gott, hilf! Wer den Vater kennt,  
Der weiß, er hilft den Kindern.  
Das hochgelobte Sakrament  
Wird deinen Jammer lindern.《-  
》O Mutter, Mutter, was mich brennt,  
Das lindert mir kein Sakrament!  
Kein Sakrament mag Leben  
Den Toten wiedergeben.《-

》Hör, Kind! Wie, wenn der falsche Mann  
Im fernen Ungerlande  
Sich seines Glaubens abgetan  
Zum neuen Ehebande?  
Laß fahren, Kind, sein Herz dahin!  
Er hat es nimmermehr Gewinn!  
Wann Seel und Leib sich trennen,  
Wird ihn sein Meineid brennen.《-

》O Mutter, Mutter! hin ist hin!  
  
Verloren ist verloren!  
Der Tod, der Tod ist mein Gewinn!  
O wär ich nie geboren!  
Lisch aus, mein Licht, auf ewig aus!  
Stirb hin, stirb hin in Nacht und Graus!

Bei Gott ist kein Erbarmen;  
O weh, o weh mir Armen!《-

》Hilf Gott, hilf! Geh nicht ins Gericht

神は私達を憐れんで下さいます!」—  
「ああお母様、お母様!むなしい想い!  
神は私に慈善を施しては下さりませんでした!  
何の役に立つことでしょう、私が祈ったところで?  
今はもうそんなこと必要ではありません。」—

「お救い下さい、神様!父なる神を知る者は、  
知っています、神が子供達をお救い下さることを。  
誉め称えられた秘蹟が  
お前の苦しみを和らげてくれるでしょう。」—  
「ああお母様、お母様、私を苦しませるものを、  
静める秘蹟はありません!  
どんな秘蹟も生命を  
死んだ者に甦らせることはできません。」—

「お聞き、娘よ!たとえ、不誠実な男が  
遠いハンガリーの地で  
彼の思いを断ち切って  
新しい契りをどのようにいたそうとも?  
放っておおき、娘よ、彼の心の赴くままに!  
決して成達は致しません!  
魂がその身を離れば、  
偽りの証しは彼の身を焼き尽しましょう。」—

「ああお母様、お母様!すべて去ってしまいました!  
た!  
何もかも失ってしまいました!  
死、これのみが私の手にしたものです!  
ああこの世に生まれなかったならば!  
消えてしまえ、私の光、永遠に消えてしまえ!  
死滅してしまえ、夜の闇と恐怖の中に失せてしま  
え!  
神には憐れみの念もありはしない;  
ああ悲しい、この哀れな私!」—

「お救い下さい、神様!お裁きにならないで下さ  
い

Mit deinem armen Kinde!  
Sie weiß nicht, was die Zunge spricht;

Behalt ihr nicht die Sünde!  
Ach, Kind, vergiß dein irdisch Leid  
Und denk an Gott und Seligkeit,  
So wird doch deiner Seelen  
Der Bräutigam nicht fehlen. 《-

》O Mutter! was ist Seligkeit?  
O Mutter! was ist Hölle?  
Bei ihm, bei ihm ist Seligkeit,  
Und ohne Wilhelm Hölle!-  
Lisch aus, mein Licht, auf ewig aus!  
Stirb hin, stirb hin in Nacht und Graus!

Ohn ihn mag ich auf Erden,  
Mag dort nicht selig werden. 《-

So wütete Verzweiflung  
Ihr in Gehirn und Adern.  
Sie fuhr mit Gottes Vorsehung  
Vermessen fort zu hadern,  
Zerschlug den Busen und zerrang  
Die Hand bis Sonnenuntergang,  
Bis auf am Himmelsbogen  
Die goldnen Sterne zogen.

Und außen, horch! gings trapp trapp trapp,  
Als wie von Rosseshufen,  
Und klirrend stieg ein Reiter ab  
An des Geländers Stufen.  
Und horch! und horch! den Pfortenring  
Ganz lose, leise, klinglingling!

Dann kamen durch die Pforte

あなたの哀れな子を！  
娘は自分が口にすることを、分かってはおりませ  
ん；

彼女の罪をお罰しにならないで下さい！  
ああ、娘よ、この世の苦悩を忘れてしまい、  
神と祝福を思いなさい、  
それでお前の魂は  
花婿がいなくともさびしくはないでしょう！」-

「ああお母様！祝福とは何なのでしょう？  
ああお母様！地獄とは何なのでしょう？  
彼のもと、彼のもとに祝福はあるのです、  
ヴィルヘルムがいなければ地獄です！-  
消えてしまえ、私の光、永遠に消えてしまえ！  
死滅してしまえ、夜の闇と恐怖の中で滅んでしま  
え！  
彼がいなければこの世にいても、  
このうえなく幸せにはなれません。」-

このように絶望は荒れ狂った  
彼女の脳裏に血の中で。  
彼女は向こう見ずにも神の摂理に  
不満を述べ続けた、  
胸の中を打ち砕きそしてもがき出す  
彼女の手は日没の中に、  
やがて弓なりの大空に  
金色の星が輝きわたった。

そして外では、耳をすませよ！パカッパカッと行  
く、  
馬蹄の音のようだ、  
すると鎖の音をさせながら騎兵が降りた  
欄干のある階段のそばに。  
さあ耳をすまして！聞きなさい！扉の鎖環の音を  
とともゆっくりと、静かに、ガラーンガラーンガ  
ラーン！  
そして戸口から聞こえてきたのは

Vernehmlich diese Worte :

»Holla, holla! Tu auf, mein Kind!  
Schläfst, Liebchen, oder wachst du?

Wie bist noch gegen mich gesinnt?  
Und weinst oder lachst du?《-  
»Ach, Wilhelm, du?... So spät bei Nacht?  
Geweinet hab ich und gewacht;  
Ach, großes Leid erlitten!  
Wo kommst du hergeritten?《-

»Wir satteln nur um Mitternacht.  
Weit ritt ich her von Böhmen.  
Ich habe spät mich aufgemacht  
Und will dich mit mir nehmen.《-  
»Ach, Wilhelm, erst herein geschwind!  
Den Hagedorn durchsaust der Wind,  
  
Herein, in meinen Armen,  
Herzliebster, zu erwärmen!《-

»Laß sausen durch den Hagedorn;  
Laß sausen, Kind, laß sausen!  
Der Rappe scharrt; es klirrt der Sporn.  
Ich darf allhier nicht hausen.  
Komm, schürze, spring und schwing dich  
Auf meinen Rappen hinter mich!  
Muß heut noch hundert Meilen  
Mit dir ins Brautbett eilen.《-

»Ach, wolltest hundert Meilen noch  
  
Mich heut ins Brautbett tragen?  
Und horch, es brummt die Glocke noch,  
Die elf schon angeschlagen.《-  
»Sieh hin, sieh her! der Mond scheint hell.

はっきりとあの言葉:

「おーい、おーい！戸を開けろ、僕の君！  
眠っているのか、いとしい君よ、それとも目覚め  
ているのか？

どのように僕のこと今も思っているのか？  
それで泣いているのか笑っているのか？」—  
「ああ、ヴィルヘルム、あなた？…こんな夜遅く？  
泣いておりました私はそれで目覚めておりました；  
ああ、大きな苦悩を堪え忍び！  
どちらからあなたは馬を駆っていらしたの？」—

「我々が馬に乗るのは真夜中のみ。  
遠くボヘミアより乗って来た。  
夜遅く僕は出発したのだ  
君を連れて行くつもりで。」—  
「ああ、ヴィルヘルム、まずお入り下さい早く！  
サンザシの茂みをうなりを上げて風が通り過ぎま  
す、  
さあ、私の腕の中で、  
いとしいあなた、身をあたためて！」—

「サンザシをわたる風にかまけるな！  
風など吹くがよい、なあ君よ、ほうっておけ！  
黒馬は足掻き鳴らし；鎖の音が拍車をかける。  
僕はここにこうしてはならないのだ。  
おいで君、裾を上げ、跳び上がりひらりと  
僕の後ろ馬に乗れ！  
きょうのうち、これから何百マイル  
君を連れ、新床へ急がねば。」—

「ああ、これから何百マイルも行くおつもりだっ  
たのですか  
私を連れてきょうのうち新婚の床に向かいつつ？  
ほらお聞きなさい、もう鐘が鳴り響き、  
すでに11時を打ちました。」—  
「向こうをごらんよ、こちらをごらん！月は明る



Wir und die Toten reiten schnell.  
Ich bringe dich, zur Wette,  
Noch heut ins Hochzeitbette. 《-

》Sag an, wo ist dein Kämmerlein?

Wo? wie dein Hochzeitbettchen?《-

》Weit, weit von hier!...Still, kühl und klein!...

Sechs Bretter und zwei Brettchen!《-

》Hats Raum für mich?《-》Für dich und mich!

Komm, schürze, spring und schwing dich!

Die Hochzeitgäste hoffen ;

Die Kammer steht uns offen. 《

Schön Liebchen schürzte, sprang und schwang

Sich auf das Roß behende ;

Wohl um den trauten Reiter schlang

Sie ihre Lilienhände ;

Und hurre hurre, hopp hopp hopp!

Gings fort in sausendem Galopp,

Daß Roß und Reiter schnoben

Und Kies und Funken stoben.

Zur rechten und zur linken Hand,

Vorbei vor ihren Blicken,

Wie flogen Anger, Heid und Land!

Wie donnerten die Brücken!

》Graut Liebchen auch?...Der Mond scheint hell!

Hurra! Die Toten reiten schnell!

Graut Liebchen auch vor Toten?《

》Ach nein!...Doch laß die Toten!《

Was klang dort für Gesang und Klang?

くさしている。

我々も死者も馬を速く走らせる。

僕は君を連れて行こう、賭けてもよい、

きょうのうちに新床をめざして。」—

「お告げになって、どこにありますあなたの部屋は？

どこに？新婚の床はどのようなのですか？」—

「遠く、ここから遠く!…静かで、涼しく小さい!…

6つの板と2つの小さな板だ!」—

「私には部屋があるのでしょうか?」—「あなたと私のために!

おいで君、裾を上げ、跳び上がりひらりと乗りなさい!

婚礼の客たちは待ち受ける;

我々のため部屋は開いている。」

美しくいとしい君は裾を上げ、跳び上がりひらりと馬上にすばやく飛び乗った;

しっかりといとしい騎兵に巻き付けた

彼女は百合のような白く清い両の手を;

さあ急げ急げ、前へ前へ進め!

蹄の音も高らかに全速力で進んでいった、

馬も騎兵も息せき切って

砂利は飛び火花が散った。

右手の方や左手に、

二人の眼前を過ぎて行く、

飛ぶように牧場や、原野や田園が!

とどろき響く橋の音!

「いとしい君よ 恐しいのか?…月は明るくさしている!

ほら! 死者たちが馬を遠く走らせる!

いとしい君は死者がこわいのか?」

「いいえ!…でも死者たちをそっとしておいて!」

あちらで響いていたのはどんな歌と音なのか?

Was flatterten die Raben?...  
Horch, Glockenklang! Horch, Totensang:  
»Laßt uns den Leib begraben!«  
Und näher zog ein Leichenzug.  
Der Sarg und Totenbahre trug.  
Das Lied war zu vergleichen  
Dem Unkenruf in Teichen.

»Nach Mitternacht begrabt den Leib  
Mit Klang und Sang und Klage!  
Jetzt führ ich heim mein junges Weib;  
Mit, mit zum Brautgelage!  
Komm, Küster, hier! komm mit dem Chor  
Und gurgle mir das Brautlied vor!  
Komm, Pfaff, und sprich den Segen,  
Eh wir zu Bett uns legen!«-

Still Klang und Sang...Die Bahre schwand...  
Gehorsam seinem Rufen,  
Kams hurre hurre! nachgerannt  
Hart hinters Rappen Hufen.  
Und immer weiter, hopp hopp hopp!  
Gings fort in sausendem Galopp,  
Daß Roß und Reiter schnoben  
Und Kies und Funken stoben.

Wie flogen rechts, wie flogen links  
Gebirge, Bäum und Hecken!  
Wie flogen links und rechts und links  
Die Dörfer, Städt und Flecken!-  
»Graut Liebchen auch?...Der Mond scheint  
hell!  
Hurra! Die Toten reiten schnell!  
Graut Liebchen auch vor Toten?«-  
»Ach! Laß sie ruhn, die Toten.«-

Sieh da! sieh da! Am Hochgericht

鴉の群が羽ばたいたのか?...  
耳をすまして、鐘の響き!聞け!死者の歌:  
「我々の肉体を埋葬せよ!」  
すると近づいて来たのは葬列で、  
柩だ棺台運ばれた。  
歌が似ていたそのものは  
池で泣くスズガエル。

「真夜中すぎて肉体を埋葬するがよい  
歌を響かせ、嘆きつつ!  
今僕は我が若き妻を連れて来た;  
共に、花嫁の宴へと!  
参れ、教会堂の番人よ、ここへ!合唱して参れ  
そして僕の婚姻の歌をうたって聞かせておくれ!  
参れ、司祭よ、祝福の祈りを唱えておくれ、  
二人が床に入る前に!」-

歌の響きも静かになって...棺台は過ぎ去った...  
彼の呼び掛けにしたがって、  
急いで急いでやって来た!あとから走り  
ついて来る蹄は黒馬の後ろすれすれに。  
さらに、前へ前へ速く進め!  
蹄の音も高らかに全速力で進んで行った、  
馬も騎兵も息せき切って  
砂利は飛び火花は散った。

飛び行く右手に、左手に  
山脈や、樹木や柵付牧場も飛び去った!  
飛び行く左手に右や左に  
村や、都市や小さな町も飛び去った!-  
「いとしい君よ 恐しいのか?...月は明るくさして  
いる!  
ほら!死者たちが馬を速く走らせる!  
いとしい君は死者がこわいのか?」-  
「ああ、そっとしておいて、死者たちを。」-

ごらん!あそこをごらん!刑場で

Tanzt' um des Rades Spindel,  
Halb sichtbarlich bei Mondenlicht,  
Ein luftiges Gesindel.  
»Sasa! Gesindel, hier! Komm hier!  
Gesindel, Komm und folge mir!  
Tanz uns den Hochzeitreigen,  
Wann wir zu Bette steigen!《-

Und das Gesindel husch husch husch!  
Kam hinten nachgeprasselt,  
Wie Wirbelwind am Haselbusch  
Durch dürre Blätter rasselt.  
Und weiter, weiter, hopp hopp hopp!  
Gings fort in sausendem Galopp,  
Daß Roß und Reiter schnoben  
Und Kies und Funken stoben.

Wie flog, was rund der Mond beschien,  
Wie flog es in die Ferne!  
Wie flogen oben überhin  
Der Himmel und die Sterne!-  
»Graut Liebchen auch...Der Mond scheint hell!

Hurra! Die Toten reiten schnell!-  
Graut Liebchen auch vor Toten?《-  
»O weh! Laß ruhn die Toten!《---

»Rapp! Rapp! mich dünkt, der Hahn schon  
ruft...  
Bald wird der Sand verrinnen...  
Rapp! Rapp! ich wittre Morgenluft...  
Rapp! tummle dich von hinnen!  
Vollbracht, vollbracht ist unser Lauf!  
Das Hochzeitbette tut sich auf!  
Die Toten reiten schnelle!  
Wir sind, wir sind zur Stelle.《-

踊っている車軸のまわりで、  
大方見える月の光に照らされて、  
ひとりふわりと舞う者が。  
「ここへ! 参れ, そこの者! ここへ参れ!  
そこの者, ここへ来てあとにつけ!  
我々に婚礼の輪舞をみせてくれ、  
二人が床に入るとき!」-

その者はさっさささと!  
後ろから軽く音をたててやって来た、  
旋風がハシバミのやぶに吹いてきて  
枯れたその葉を鳴らし行く。  
進め, 進め, 前へ前へ進め!  
蹄の音も高らかに全速力で進んで行った、  
馬も騎兵も息せき切って  
砂利は飛び火花が散った。

まわりのものは飛び去った, 月の光に照らされて,  
はるか彼方に飛び去った!  
さらに上空高くへ  
空も星も飛び去った!-

「いとしい君よ 恐しいのか? ... 月は明るくさして  
いる!

ほら! 死者たちが馬を速く走らせる!

いとしい君は死者がこわいのか?」

「ああつらい! 死者たちを  
そっとしておいて!」- - -

「黒馬よ! 黒馬よ! 思うに, もう雄鶏が鳴く頃  
だ...

やがて時の砂は流れ去るだろう...

黒馬よ! 黒馬よ! 僕は夜明けを感じ取る...

黒馬よ! ここから逃げ!

ついに終わった, この旅が!

新床は開かれている!

死者たちが馬を速く走らせる!

我々は, 目ざした場所にいるのだ。」-

Rasch auf ein eisern Gittertor  
Gings mit verhängtem Zügel;  
Mir schwanker Gert ein Schlag davor  
Zersprengte Schloß und Riegel.  
Die Flügel flogen klirrend auf,  
Und über Gräber ging der Lauf;  
Es blinkten Leichensteine  
Rundum im Mondenscheine.

Ha sieh! Ha sieh! Im Augenblick,  
Huhu! ein gräßlich Wunder!  
Des Reiters Koller, Stück für Stück,  
Fiel ab wie mürber Zunder.  
Zum Schädel, ohne Zopf und Schopf,  
Zum nackten Schädel ward sein Kopf,  
Sein Körper zum Gerippe  
Mit Stundenglas und Hippe.

Hoch bäumte sich, wild schnob der Rapp  
Und sprühte Feuerfunken;  
Und hui! wars unter ihr hinab  
Verschwunden und versunken.  
Geheul! Geheul! aus hoher Luft,  
Gewinsel kam aus tiefer Gruft.  
Lenorens Herz mit Beben  
Rang zwischen Tod und Leben.

Nun tanzten wohl bei Mondenglanz  
Rundum herum im Kreise  
Die Geister einen Kettentanz  
Und heulten diese Weise:  
»Geduld, Geduld! Wenns Herz auch bricht!  
Mit Gott im Himmel hadre nicht!  
Des Leibes bist du ledig;  
Gott sei der Seele gnädig!«

鉄の格子戸へと迅速に  
手綱を緩めて向かって行った;  
しなやかな若枝の鞭の一打ちは  
錠と門をこわして飛ばした。  
さっと扉は音たてて開いた,  
さらに墓場を越えて馬は駆け抜けた;  
輝いた墓石は  
周り一面月の光に照らされて。

ほら! 見てごらんよ! 一瞬に,  
ああっ! 身の毛もよだつ不思議なこと!  
騎兵の胴鎧は、粉々に,  
ボロボロの金垢のように取れて落ちた。  
頭髮は、すべて抜け落ちて,  
頭皮もむき出した頭となった,  
彼の体は骸骨となり果てた  
砂時計と死神の大鎌を持って。

高く後脚立ちで、荒々しく鼻を鳴らして黒馬は  
それから火花をまき散らした;  
さっと! あの娘の足もと地下深く  
埋没し消えてなくなった。  
絶え間なく! 吠える声! 上空からは,  
すすり泣く声! 墓の奥深く。  
レノールの心は震えて  
苦闘した生死の間で。

そのとき舞踊は月光のもと  
あたり一面輪になって  
妖精どもがぐるりと踊りの輪  
吠えるようなあの節が:  
「堪えよ、忍べよ! たとえ心が張り裂けようとも!  
天にまします神と争うな!  
肉体を離れたお前;  
神よこの魂を憐れみ給え!」

Text: „Deutsche Balladen“ Auswahl und Nachwort von Konrad Nussbächer, Reclam Universal-Bibliothek Nr. 8501-07, Stuttgart 1967, S. 66 ff. なお訳出にあたってはできるだけ口語調にした。また先行訳として、森本覚丹『詩と音楽』理想社 1952年, 190-208頁を参照した。

(注14) 『デンマーク 文学作品集』 F. J. ビレスコウ・ヤンセン 牧野不二雄 監修 東海大学出版会 1976年。なお、『妖精の呪いの一撃』の翻訳は、菅原邦城氏に拠る。

(注15) D. N. L. Bd. 74, Ab. 2, S. 283 f.

デンマーク語の原詩は妖精の国へ入った者は、誰でも迷いこんで破滅するという伝説がもとになっている。なお、以下の記述にあたっては同上書の注釈部分を参照した。(a. a. O. S. 278 ff.)

(注16) ハイネは『精霊物語』 („Elementargeister“, 1935/36) の中で妖精を<sup>エルフェ</sup>空気の精であるとみなしてこの詩を次のように紹介している。(なお傍点筆者) 「エルフェは夢の中にあらわれるのではなく、現実の中に現われる。それだけにエルフェの優雅な本質は一層鋭くわれわれに迫ってくる。……反覆はいつも けれどもダンスはすばやく森の中を通って行く。(Aber das Tanzen geht hin so schnell durch den Wald) ということばである。……踊りは空気の精にとって特徴的なものである。」(小沢俊夫訳 岩波文庫版『精霊物語』 24-26頁。(Vgl. Heinrich Heine : Säkularausgabe Bd. 9, S. 94 f.)

(注17) エミール・シュタイガー : 同上書 300 頁 (Emil Staiger ; a. a. O.)

(注18) Vgl. Goethes Werke, H. A. Bd. 1, S. 482.

(注19) このようなわけでハンプルク版ゲーテ全集の注釈者 Trunz は『妖精の歌』を『魔王』の前に配置している。(Vgl. H. A. Bd. 1, S. 154.)